

英語研究法

八幡成人



はじめに

学生時代、市河三喜他(編)『英語イデオロム辞典』(研究社)¹⁾に感動を覚え、卒論には現代作家の引用例でイデオロム辞典を作ろうなどと大それた(1)ことを考えたのがそもそも用例を集め始めたきっかけであった。ちょうどその頃「英語では顔の描写をする際に鼻のことはあまり言わないよ」²⁾という意味の記述に接し、ようしそれではどれくらい集まるか集めてやれと思つて始めた鼻の描写カードが今ではいつの間にか200枚を越えてしまった。その一部は筆者の関係する学習辞典に盛り込んで何とか目を見ることができたが、「鼻の英語」なるあまり聞いたことのない研究分野を勝手に開拓してしまつたわけである。問題意識を持って英語を読んでいると不思議と目当ての表現に出くわすからつい面白くなつてしまふ。もちろん、何が問題になるかについては、日頃からすぐれた研究に触れて充電をしておく必要があることは言うまでもない。本稿では以来細々と続けている用例による英語研究のサンプルをいくつか示す。

語法記述の問題

(1) There is a path on either side of the road. このような either の用法に対して英和辞典には「この意味では both, each のほうが普通」といった注記が見られる。恐らく OALD の (Cf. the use of both and each, which are more usu) をそのまま利用したものと思われるが、これだこの either が(まれ)であるという誤った印象を与えかねない。

(2) There was a long narrow photograph on

1) この辞典が LDCE 編集に大きな貢献をしたことはあまり知られていない。LDCE の Senior Editor, John Ayto 氏からお聞きしたことである。

either side of the door.—H. Robins, *Where Love Has Gone*.

(3) The pair did not even turn around to look at their captive, who was placed with a guard on either side, as before.—J. Gardner, *License Renewed*.

手元には40例を越える用例が集まつており、十分に確立した語法と思われる。大部分は side と共に起しているが、他に end, hand もある。both と違い、個を強調するが (cf. Wood (1962, 1982²⁾), *CULD* が (formal) とラベルしているようにやや形式ばった表現であろう(手元の用例のうちで1例だけが会話文、あとはすべて地の文に現われている)。新刊の E.S.C. Weiner, *The Oxford Minguide to English Usage*, p. 173 にも関連の記述がある。

(4) *Either* is frequently used in sense (2), in preference to *each*, with reference to a thing that comes naturally in a pair, e.g. *end, hand, side*. This use is sometimes ignorantly condemned but is both the older sense of *either* and commonly found in good writers of all periods.

ラベルの問題

(5) The wheel was discovered very early on in human history. [LDCE] early on という句を、“esp BrE” [LDCE], “Br” [LMED], “Brit” [Webster³⁾] とする辞典がある。「大英和」を初めとする英和辞典のほとんどが(英)(主に英)として起しているのは、これらをつくりそのまますたためと推測される。ところが最近のアメリカの辞典の多くが (WBD, WNW, AHD, OAD, RHP, Doubleday, NYT) 何のラベルも付けていないのが気になっていた。自分で用例を集めながら、英米の辞書出版社はこれらについて多くの用例と資料を持っているので

直接問い合わせるのも有効な手段である。²⁾ *WBD* の Chief General Editor である Sol Steinmetz 氏より貴重な情報を提供していただいた。それによれば *WBD* の用例ファイルでは1961年頃までは(英)用法であった。1961年に *The New York Times Magazine* と *The New Yorker* より用例が採取され、以降1963年までに *Esquire*, *Commentary*, *Encounter*, *Harper's*, *Show*, *Newsweek* などの雑誌、さらには Gore Vidal, Norman Podhoretz, Benjamin DeMott, Dwight MacDonalld といったアメリカ作家からの使用例が集まった。そのようなわけで *WBD* では1963年の初版以来この句には地域ラベルを付けずに収録してきた、というのである。Oxford University Press の膨大な用例ファイルにもあつてはいたが、アメリカよりイギリスでより多く使われているという証拠は何一つないという調査結果をいただいている。³⁾ 新刊の *WNCED* の新たな特徴である E. W. Gilman の手になる *Usage* 欄はとて面白い読み物となっているが、その中に early on に関する記述が見える:

(6) *usage* This adverb is sometimes objected to in American writing as an obtrusive Britishism. It is a relative newcomer to the language, having arisen in British English around 1928. It seems to have filled a need, however. It came into frequent use in American English in the late 1960s and is now well established on both sides of the Atlantic.

LDCE 編集部が “esp BrE” のラベルを撤回する、と言つてこられた理由はもう明らかであろう。*Webster*³⁾ 編集部でもすでに機会を見て訂正するよう手配済のようである。英和辞典から(英)のラベルが消える日も近いと思われる。

訳語の問題点

現場ではかなり歪められた訳語が幅をきかせている例が少なくない。in fact を何でも「実は」と片付けることの問題点は、安井裕子などの発言により英和辞典でも改善が見え始めた。他にも after all 「結局」、keep early hours 「早寝早起きする」、What's the matter with you? 「どうかなさつたの

ですか」、be willing to 「喜んで...する」といった受験生にお馴染みの表現にも問題は潜んでいる。興味のある方はそれぞれ100例程度集めてじっくり分析してみられれば問題点は自ずから見えてくるはずである。ここでは最近よく話題となる air-conditioner を取り上げる。

英英辞典の扱いは大きく2つに分かれ、冷暖房を含むとする COD ((of room, building, etc.) having the air in it cleaned and brought to required humidity (and temperature) などと、冷房のみとする LDCE (the system that uses one or more machines (air-conditioners) to keep air in a building cool and usu. dry in the summer) とである。筆者は英米の小説類から100例以上におたる air-conditioner, air-conditioning, air-conditioning の用例を拾ったが、そのすべてが冷房に使われていること、また現地での若干の調査に基づいて、LDCE の冷房のみの定義を取りたいと思う。

(用例省略)

しかし技術の進歩により、冷・暖房両方できる装置が出現しており(日本でも最近「エアコン暖房」という言葉が定着しつつある)、これをカバーするために air-conditioner を使うことは理論的には可能であり、COD の定義もその意味では精密であり正しいと思われる。が現実には air-conditioning と冷房の結びつきが非常に強いことは手元の実例が何よりも雄弁に物語っているのである。この事情につき英米差は認められたい。

共起関係の問題

jet-black を英英辞典は “very dark shiny black” [LDCE], “very black” [HEED], “deep, glossy black” [OALD] と定義し、英和辞典では「黒玉色の、漆黒の」程度の訳語で済ませている。用例を集めてみると、この語は hair と共起することほとんどで、髪の色を強調して使われるのである。このことは OED にも書いてないが、一部の辞典には jet-black hair [CULD, CED], Her hair is jet-black. [CULD] という適切な例が引かれていてよい。

(7) She was a stocky forty-five-year old woman with jet-black hair pulled back into a tight bun on the crown of her head.—R. Cook, *Brain*.

(8) “I was just thinking that if we ever had children and they ever had anything but

2) Merriam-Webster Inc. (47 Federal Street, P.O. Box 281, Springfield, MA 01101) は the Language Research Service を用意して、利用者からの質問に対し1,300万以上の用例に裏付けられた解答をくれる。

3) Jonathan Crowther 氏の御好意による。

